

松 山 大 学 論 集
第 34 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 2 2 年 12 月 発 行

比嘉清松学長と松山大学の歴史

川 東 靖 弘

比嘉清松学長と松山大学の歴史

川 東 靖 弘

目 次

はじめに

1) 1998 (平成 10) 年 1 月～3 月

2) 1998 (平成 10) 年度

3) 1999 (平成 11) 年度

4) 2000 (平成 12) 年度

おわりに

は じ め に

1997 (平成 9) 年 12 月末で宮崎満学長の任期が満了するので、松山大学学長選考規程 (1993 年 5 月 15 日制定施行) にもとづき、立候補および推薦の受け付けがなされた。立候補者はなく、推薦は経済学部 of 比嘉清松教授 (61 歳) 一人だけであった。新制度の学長選考規程の欠陥が早くも見られた。

11 月 26 日、比嘉教授への信任投票が行なわれた。結果は、選挙権者 204 名、棄権 25 票、投票総数 179 票、無効 (白票) 13 票、有効投票が 166 票、賛成 154 票、反対 12 票で、比嘉教授が選出された。

比嘉教授の経歴は次の通りである。

1936 年 5 月沖縄県生まれ。沖縄戦で辛酸を体験。米軍占領下、本土への特別留学生として、1956 年 4 月大分大学経済学部入学、1960 年 3 月同大学卒業、同年 4 月神戸大学大学院経済学研究科修士課程入学、1962 年 3 月同課程修了、同年 4 月同博士課程入学、1965 年 3 月同博士課程単位取得、同年 4 月尾道市立短期大学講師に就任。1968 年 4 月松山商科大学経済学部助教授として赴任、

1974年4月同教授に昇格。担当は西洋経済史、経済史概論。1978年7月～1979年9月までドイツに留学。1985年4月から1989年3月まで経済学部長。1989年1月1日から神森理事長の下で法人理事（財務担当）となり、1994年12月31日まで務めた。1997年4月1日からは図書館長を務めていた¹⁾。比嘉教授は温厚で人格円満、バランス感覚があり、気配りもし、人の意見によく耳を傾ける人であった。

本稿は比嘉清松学長・理事長時代（1998年1月～2000年12月）の松山大学の歴史について考察するものである。

本時期は、国際面では、ソ連が崩壊し、冷戦体制が終わり、アメリカの一強支配、一人勝ちの時代。特に民主党のクリントン政権（1993年1月～2000年1月）のもとでアメリカ資本主義は好景気を続け、繁栄の時代であった。それとは対照的に、日本は橋本龍太郎（1996年1月～1998年7月）、小渕恵三（1998年7月30日～2000年4月）内閣下、バブル崩壊後の平成不況が一段と進行し、1997年の金融危機を契機に、バブルに踊った企業・不動産会社や銀行・証券会社・保険会社等が次々に倒産した平成大不況の時代にあたる（1997年11月北海道拓殖銀行、三洋証券・山一証券、1998年10月日本長期信用銀行、12月日本債権信用銀行、2000年7月そごう等々）。また、橋本内閣下消費税増税があり（1997年4月、3%から5%に）、消費が落ち込み、国内総生産も1998年、1999年には連続マイナスとなり、失業者、失業率も増大した苦難の時代である。大学をみると、18歳人口が減少し続け、「私学冬の時代」の真っ只中にあり、時期的にも「世紀末」であり、そのような厳しい環境の中、大学・法人の舵取りがなされた。

1) 1998（平成10）年1月～3月

1998年1月1日、宮崎満学長の後を継いで、比嘉清松教授（61歳）が第11

1) 比嘉清松退職記念号より。

代松山大学学長兼理事長に就任した。また松山短期大学学長も兼務した。

比嘉清松新学長の就任の挨拶は次の通りである。

「このたび、私は、浅学非才をかえりみず、宮崎満前学長の後を引き継ぎ、理事長・学長に就任致しました。今更のようにその職責の重さを噛み締めているところであります。私の任期は丁度 20 世紀最後の 3 年ということになり、従って、これからの 3 年間を、一言で言えば「総括と展望の時期」と位置付けております。すなわち、20 世紀の松山大学を総括し、21 世紀を展望し、次の第一歩を踏み出す時ということであります。

大正 12 年に本学が高商としてスタートしたときの教員スタッフは総数 7 人、学生数は僅かに 60 名でありましたから、敗戦時には学生数が 680 名とおよそ 11 倍、そして、今日、6,500 名と 100 倍以上の学生数の増加であります。要するに、この 75 年は曲折を経つつも、規模の拡大の歴史であったのであり、この間の日本の人口の増加はおよそ 2 倍でありますから、大学の大衆化は一目瞭然、本学もまたその例外ではなかった訳であります。

大学改革が叫ばれていながら、それが遅々として進まないのは、大衆化への対応がうまくいかず、学生の多様化を直視していないことに起因しているのではないのでしょうか。今日、全体的に見て学部教育において、かつての大衆化以前の時代のような真の専門教育は成立しているのでしょうか。かつての専門教育は大学院に移行しつつあるのではないのでしょうか。21 世紀は大学院の時代－21 世紀の始めか、中頃かはともかくとして－になるものと思いますが、だとすれば、学部教育はどうあるべきでしょうか。この問題は各現場で論議すべき大事な課題であります。いずれにしても、大学の危機が『教育現場の危機』であるとすれば、改革のすべては『教育現場の深刻な状況』を直視するところから始まります。松山大学自己点検・評価準備委員会の報告書は改革の一つの方向を示していると受け止め

ています。例えば『入口管理のさらなる改善と過程管理，出口管理の重視』という事です。ともあれ、『現場』は今どうなっているのか、いかにすれば『現場』は活性化され得るか―常に『現場』との対話の中から将来への活路が見出され得るものと信ずるものであります。

大学が教育・研究事業を使命としていることは論を待つまでもありません。大学にあっては教育と研究は不即不離『教育なき研究がないように，研究なき教育もない』ものと考えています。本学がこれまで研究に対して他大学に比して遜色のない相当の手当をしてきたのもこのような理由によるものと思うのであります。

大学の今一つの危機は財政の危機であります。現時点での本学の財務状況は悪くありません。問題は平成15年以降であり，状況は危機的であります。当然ながらどのようにして必要な経費を捻出するかが，最大の課題となります。まだ，先行き不透明な部分がありますが，ただ，今言える事は，危機に備えて財務体質の改善を図っていくことが求められているという事です。（中略）

私ごとを申し上げて恐縮ですが，私は，少しばかりヨーロッパの歴史をやってきたということから，過去を振り返る習い性ができてしまったことを自覚致しております。従ってこれからも折に触れて松山大学の過去を語ります。しかし，それは回顧趣味からではなく，できる限り過去を通して未来を語りたいと考えているからであります。これを私の思考の縦軸であるとすれば，横軸は元「留学生」としての目であります。これまたプライバシーをさらけ出して恐縮ですが，私は，戦後の米占領下の沖縄出身ということで，法学部の石原善幸教授とともに，文部省の特別措置－留学制度－によって大学および大学院で学ぶ機会に恵まれました。つまり，パスポートを申請し，ビザを取得し，『日本』に入国した『留学生』としての生活体験を有しています。昨年末，本学の総合研究所主催で開催されました国際フォーラム“日本の目，韓国の目，『在日』の目”は，複眼で

見ること、多面的に見ることの意義を個別具体的に教えてくれたものとして、成功であったと評価していますが、これをもじって言えば、『日本の目、沖縄の目、ヨーロッパの目』で見ることを大事にしたいということがあります。(中略)

私は『所信』の中で現場主義を行動・思考の指針とすることを申し上げましたが、大学には学生の現場、教育の現場、研究の現場、事務の現場、と様々な現場が存します。従って、勿論、現場間の相互の矛盾は確実に起きてくるでしょうが、その際大切なことは相互理解を深めるということに尽きると思います。私は調整に力を尽くすつもりでいます。そして、現場主義が、結局のところ、現場の士気をたかめることにつながり、危機克服の条件であると考えています。従って、これは私自身に対する戒めとして肝に銘じておきたいと思います。(中略)

どうか教職員の皆様をはじめ、関係各位におかれましては、健康に十分お気をつけになり、まずは今年もお元気で持場を乗り切られますことをお祈りし、ご挨拶に代えさせていただきます」¹⁾

このように、比嘉新学長は沖縄出身のドイツの中世史家であり、歴史を複眼的に見ることの大事さを重視され、また大学の大衆化を踏まえ、改革の必要性・現場主義を唱え、現場との対話の中で大学運営を行っていくことを表明された。

比嘉学長就任時の大学の校務体制は次の通りであった。経済学部長は光藤昇(1997年4月1日～1999年3月31日)、経営学部長は石田徳孝(1997年2月1日～1999年1月31日)、人文学部長は飛驒知法(1996年11月1日～2000年10月31日)、法学部長は田村譲(1997年4月1日～1999年3月31日)、経済学研究科長は村上克美(1996年4月1日～2000年3月31日)、経営学研究科長は清水茂良(1996年4月1日～1998年3月31日)が務めていた。図書館

1) 『学内報』第253号、1998年1月。

長は新しく倉田三郎（1998年1月1日～2000年12月31日）、総合研究所長も新しく中山勝己（1998年1月1日～1999年1月31日）が就任した。教務委員長は国崎敬一（1996年4月1日～1998年3月31日）、入試委員長は久保進（1997年4月1日～1998年3月31日）、学生委員長は青木正樹（1995年4月1日～1999年3月31日）が務めていた。事務局長は村上泰稔が務めていた（1997年4月1日～）。

学校法人面では、原田満範（1995年1月1日～1998年11月30日、財務）、岩林彪（1995年12月1日～2000年12月31日、教学）、宍戸邦彦（1997年5月1日～2001年1月31日、総務）が理事を務めていた²⁾

1月1日、「学校法人松山大学法人業務自己点検・評価規程」が制定・施行された。

1月17、18日の両日、1998年度の大学入試センター試験が行なわれ、結果は次の通りであった³⁾

	募集人員	志願者	合格者
経済学部	40名	1,463名	404名
経営学部	100名(前期)	1,265名	725名
人文英語	20名	375名	264名
法 学 部	20名	678名	407名
計	180名	3,781名	1,800名

2月9～12日にかけて、1998年度の一般入試が行なわれた。9日が経済学部、10日が経営学部、11日が人文学部、12日が法学部の試験であった。一般入試の募集人員は経済学部290名、経営学部250名、人文学部英語英米文学科60名、同社会学科105名、法学部180名であった。試験会場は、本学、東京

2) 『学内報』第244号、1997年4月。同第254号、1998年2月。

3) 『学内報』第247号、1997年7月。同第255号、1998年3月。

(日本私学振興財団), 大阪(大阪YMCA会館), 岡山(代々木ゼミナール岡山校), 広島(代々木ゼミナール広島校), 小郡(北九州予備校山口校), 福岡(水城学園), 大分(大分府内学園), 高松(高松高等予備校)の9会場。検定料は3万円。志願者は経済学部2,272名(前年2,300名), 経営学部2,013名(前年2,366名), 人文学部英語英米文学科505名(前年568名), 同社会学科1,120名(前年1,192名), 法学部1,356名(前年1,603名), 合計7,266名(前年度8,029名)で, すべての学部で志願者が減少し, 全体では前年度に比し, 763名, 9.5%の減少となり, 厳しい状況が続いた。合格発表は2月20日。経済学部1,030名, 経営学部847名, 人文学部英語英米文学科261名, 同社会学科471名, 法学部646名, 合計3,255名(前年3,170名)を発表した。実質競争率を見ると, 経済2.1, 経営2.3, 人英1.9, 人社2.3, 法2.0, 計2.2倍で, 人英は2倍を切った。なお, 経済学部は歩留り予想が外れ, 3月11日271名の追加合格を出し, 実質競争率は下がり, 危機感が広がった。学費は前年と同一の据え置きで, 入学金20万円, 授業料57万円(ただし, 2年次以降は2万円のステップ制とする), 教育充実費も17万円であった。学費据え置きは消費税の引上げ(1997年4月, 3%から5%)もあり, 家庭の可処分所得は上向いていないためであった⁴⁾。

2月26日, 本学の教育研究活動, 大学運営の現状を把握し, 改善すべき点, 今後の改革の方向を明らかにするために, 「松山大学自己点検・評価規程」を制定した⁵⁾。

3月6日, 本学と愛媛大学は, 1995年以来単位互換協定を締結していたが, 文部省の通知により, 来年度から授業料相互不徴収とする「愛媛大学と松山大学との単位互換に関する協定書」が締結された⁶⁾。

3月6日, 大学院第Ⅱ期入試(修士・博士)が行なわれた。経済学研究科修

4) 『学内報』第247号, 1997年7月。同第250号, 1997年10月。同第255号, 1998年3月。同第256号, 1998年4月。

5) 『学内報』第256号, 1998年4月。

6) 同。

士課程は1人が受験し、合格者はいなかった。経営学研究科修士課程は11人が受験し、4名が合格した。博士課程は共に志願者がいなかった⁷⁾

3月6日、任期満了に伴う大学院の研究科長選挙が行なわれ、経済学研究科長は村上克美教授(59歳、経済政策総論)が再任された。経営学研究科長は笠原俊彦教授(56歳、経営学原理・経営学史)が選出された⁸⁾

3月20日、午前10時より愛媛県民文化会館にて卒業式が行なわれ、経済学部469名、経営学部458名、人文英語115名、社会144名、法学部280名が卒業し、経済学研究科修士課程2名、経営学研究科修士課程5名が修了した。経済学研究科博士後期課程では1名が修了し、本学博士号第1号であった。

比嘉学長は式辞で、博士号第1号誕生の慶びを報告し、ついで本学の歴史、校訓三実主義を簡潔に述べ、そして、今日は明治維新、敗戦につぐ第三の転換期にあたる激動の時代であるが、努力してそれを乗り越え、幸福な人生を目指して下さい、と卒業生を激励した⁹⁾。それは次の通りである。

「ひと雨ごとに、木々の若芽がめぶき桜の開花も間近い今日この頃、本日、ここに平成九年度松山大学大学院学位記・卒業証書・学位記授与式を挙行するにあたり、ご多用の中、お足もとの悪い中、多数のご来賓並びにご父母の皆様のご臨席を賜り、新卒業生と教職員の出席のもとに目出度く盛大に挙行できますことは、わが大学の最も光栄とするところであり、謹んで関係各位に対しまして厚く御礼を申し上げます。

本日晴れの卒業を迎えた者は、大学院博士課程一名、修士課程八名、四学部一千四百六十六名、以上合せて一千四百七十五名であります。とりわけ、今年度記念すべきことは松山大学七十五年の歴史の中で博士号第一号の誕生であります。本学大学院は、昭和四十七年四月、経済学研究科修士

7) 『学内報』第256号、1998年4月。

8) 同。

9) 同。

課程設置に始まり、昭和四十九年四月同博士後期課程設置と続き、そして、昭和五十四年四月、経営学研究科修士課程設置、続いて昭和五十六年、同博士後期課程の設置となって今日に至っております。本日、博士課程開設から二十四年にして、ようやく博士（経済学）を送り出すに至りましたことは、今般、珠玉の学位論文を提出されて、博士号第一号の栄誉に輝いた越智良二氏お一人の慶びに止まらず、わが大学にとりましても慶びであり、また、大いなる誇りであり、ここに博士誕生に尽力されました関係各位に御礼を申し上げます。なかんずく、本大学院設置に尽くされ、礎石を築かれた、今は故人となられた先生方そして事務職員を含め、わが大学の先輩諸先生方のご貢献に対しまして、この場を借りて謝意を表しますことをお許し頂きたいと思うものであります。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんは、今、学生生活に別れを告げ、社会に羽ばたこうとしています。勿論、中にはさらに進学される方もおいでのことと思いますが、多くの皆さんは実社会へ第一歩を踏み出す方かと受け止めます。いずれにしても、卒業と言う事は人生の中の大きな節目であり、これまでの試練に満ちた幾多の関門を通過し、晴れて栄えある卒業の日を迎えられた皆さんに対して心から祝意を表したいと思います。

ご父母の皆さん、お子様のご卒業おめでとうございます。これまで手塩にかけてお育てになり、支えて来られ、本日、このようにお子様の栄えある日を迎えられたことに対しまして、心からお慶びを申し上げますと共に、皆様方のこれまでのご労苦に思いを致し、あらためて敬意を表する次第であります。

さて、卒業生の皆さん、卒業という人生の大きな節目に当たり、皆さんが学び、後にされようとする松山大学とは何であったのか、何を如何に学んだのか、そして、長い人生の中で、今、どのような位置にあるのかということ、つまり、皆さん自身のこれまでの歩みを顧みて、これから展望し

てみるということは、世紀末の激動する社会に出て行く上で大切なことだと考え、二、三のことを申し上げ、以下贈る言葉とさせていただきます。

まず、皆さんにとって自明のこと、二つの確認から始めましょう。その一つ、それは皆さんが学んだ松山大学についてであります。わが大学は大正十二年（一九二三年）設立の旧制の松山高等商業学校に遡り、今年創立七十五年、これまで送り出した卒業生はおよそ四万五千名にのぼり、皆さんがこれから仲間入りする同窓会、温山会員は全国各地で活躍しており、本学は実に多くの優れた人材を世に送り出している歴史と伝統を誇る大学であることを改めて再確認して頂きたいと思います。

次に、もう一つ大事なことを申し上げておきます。それはわが大学の校訓、真実、忠実、実用の三つの「実」をとった三実主義のことです。この精神は、かみくだいて申しますと、一に真摯に積極的に奥深い真理を探究する態度であり、二に謙虚で誠実に人に接し、節操を重んじ、自らの言動に対してあくまでも責任を負う態度であり、三に真理を生活の中に生かし、社会に奉仕する積極進取の実践的態度のことです。この三実主義の精神は、バブルのように一時流行して消え去るようなものではなく、たえず変転し、流動する人間社会の中で変わらざる人間に関する真理、万古不易の人間のあるべき生き方を指し示しているものであります。したがって、皆さんがこれから社会へ出て行くにあたり、この三実精神をしっかりと我が身に体して巣立って頂きたいと強く願っています。

さて皆さんは大学で何を学んできたでしょうか。勿論、人文科学、社会科学を中心に、各自の専門分野の勉強は当然してきたものと思います。それはそれで立派な成果です。だが、皆さんが大学で学んだ知識の量というのは、学ぶべき知識の量からみると、本当に微々たるものであります。まだまだ学ぶべきことが沢山あるということです。ですから、社会へ出てから学ばなければなりません。それなら、大学とは何だったのか？ 何の意味があったのか？ 一言でいえば、それは学び方を学んだということに

なります。比喩的に申しますと、「辞書の引き方」を学んだと言うこともできます。社会に出て、人生の歩みの中で、皆さんは必ず知らない事、解決の困難な問題にぶつかると思います。人生はいつも順風満帆という訳にはいきません。加えて、人間社会は往々にして相矛盾することが併存する複雑なものであり、解答も解決も単純でない場合が多いと言ってよいでしょう。その際、誰も解答や解決の方法を教えてくれません。解答は自分で見つけ、問題は自分で解決しなければならないのであります。したがって、難問に遭遇した時、皆さんはひとに甘えることなく、自分で判断し、自立した精神をもってことに立ち向かっていかなければならないのであって、その時こそ大学で学んだ真価が問われるのであります。もとより、言うは易く行うは難し、社会で経験を積み、失敗を教訓にしていくなかで姿勢を終世忘れてはなりません。

ところで、皆さんがこれから出ていく社会はどうでしょう。今日、世紀末のイメージは、十九世紀末の世界がそうであったように、我々の心を重くしている観がないでもありません。また、世界は、そして、日本は大きな転換期にあるものと思われます。近代日本史に限定して言えば、今、日本は明治維新、第二次世界大戦による敗戦に続く、第三の転換期にあるのではないかと思われます。先行き不透明な激動の中、二十一世紀がどのような社会になるにせよ、二十一世紀前半をその肩に担うのは皆さんであります。

したがって、これから社会に出ていく皆さんに対して、最後に紹介したいことは、百歳近く生きたある古老の人生訓についてであります。その人によると、人生をマラソンに喩え、次のように三つの時期に区分しています。すなわち「人生八十歳～九十歳をゴールとして、無事完走するには、その人のもって生まれた素質、努力、健康が大切である。個人差はあるが、大体、十五歳から二十歳頃までは、素質－その人のもって生まれたものの－勝負の時期であり、二十歳を越して五十歳頃までは努力の勝負の

時期であり、五十歳頃から後は健康の勝負の時期である」と言う事であります。人生をマラソンに喩える、この人生三段階説に従うと、皆さんは今第二段階の「努力の勝負の時期」にさしかかっていることになります。ご承知の通り、マラソンは四十二・一九五キロでありますから、人生に当てはめますと、皆さんは今およそ十キロ地点を走っていることになりますでしょうか。皆さんはあのマラソンを実際にご覧になってお分かりになると思いますが、十キロ地点のトップ走者が、必ずしもゴールにトップでテープを切っているのではないということであり、むしろそうでない場合が多いということであります。人生もまた同様であります。ということは、まだ十キロにも達していない皆さんが、これから人生というマラソンの幸福な完走のためには、体調を整え、ペースを守り、たゆまぬ努力が求められるということであります。皆さんのマラソン人生は始まったばかりであり、これからなのであります。皆さんのこれからの二十年、三十年は第二段階の「努力の勝負の時期」でありますし、人生マラソンの勝敗を決定的にするのは実はこの第二段階ではないかと思っています。しかし、どんなに素晴らしい才能があり、どんなに努力をしても、健康でなければ人生マラソンを完走することはできません。五十歳代になりますと、人によって前後しますが、第三段階の「健康の勝負の時期」に移っていくものと思われます。どうか卒業生の皆さん、本学でめぐり合った学友を二度と得難き生涯の友として大切にし、これからの第二段階の「努力の勝負の時期」を乗り切り、続く「健康の勝負の時期」を迎えられて、幸せな人生の完走を目指してください。

戻れない 時の中を 人は生きている
いくつもの思い出を 抱きしめながら
君よ 青春の翼広げ あしたの空へ羽ばたこう

平成十年三月二十日

松山大学

学長 比嘉 清松 』¹⁰⁾

3月31日、経済学部では浦坂純子（計量経済学）が退職、転出した。経営学部では湊晋平（経営工学）が65歳で定年退職し、再雇用となり、吉田友之（保険論）が退職し、転出した。人文学部では渡辺良彦（英語）が退職し、転出した。法学部では城戸正彦（国際法）が退職した¹¹⁾

2）1998（平成 10）年度

比嘉学長・理事長の1年目である。本年度の校務体制は、経済学部長は光藤昇、経営学部長は石田徳孝（1997年2月1日～1999年1月31日）、人文学部長は飛騨知法、法学部長は田村譲が続けた。経済学研究科長は村上克美が再任され、経営学研究科長は新たに笠原俊彦が就任した（1998年4月1日～2000年3月31日）。図書館長は倉田三郎、総合研究所長も中山勝己が続けた。教務委員長は新たに館野日出男が就任した（1998年4月1日～1999年4月30日）、入試委員長は新たに高橋紀夫が就任した（1998年4月1日～1999年3月31日）。学生委員長は青木正樹が続けた。事務局長は村上泰稔が続けた。

学校法人面では、原田満範（財務）、岩林彪（教学）、宍戸邦彦（総務）が理事を続けた¹⁾

本年度も次のような新しい教員が採用された²⁾

経済学部

新規なし。

10) 松山大学総務課所蔵。

11) 『学内報』第256号、1998年4月。

1) 『学内報』第256号、1998年4月。同第257号、1998年5月。

2) 『学内報』第256号、1998年4月。

経営学部

鳥居 鮎太郎 1960年3月生まれ。北陸先端科学技術大学院博士後期課程。講師として採用。コンピューター通論。

中村 雅人 1969年3月生まれ。一橋大学大学院商学研究科博士後期課程。講師として採用。保険論。

南 学 1967年12月生まれ。広島大学大学院教育学研究科博士後期課程。講師として採用。教育心理学，心理学。

人文学部

尾崎 恒 早稲田大学第一文学部卒。教授として採用。時事英語，国際事情。

大内 裕和 東京大学大学院教育学研究科博士課程。講師として採用。教育社会学，コンピューター概論。

法学部

廣澤 孝之 九州大学大学院法学研究科博士後期課程。講師として採用。政治学，政治課程論。

4月3日，午前10時より愛媛県県民文化会館にて入学式が行なわれ，経済学部468名，経営学部511名，人文学部英語英米文学科120名，同社会学科157名，法学部327名が入学し，大学院経済学研究科修士課程は4名，経営学研究科修士課程は5名が入学した。

比嘉学長は式辞で，本学の歴史，校訓三実主義や卒業生の活躍ぶりを紹介し，大学は，人間とは何かを探究し，また，人間社会がどうなっているのかを探究するところであり，勉強の仕方をアドバイスし，本学の国際化のプログラム等を紹介し，キャンパスで素晴らしい青春のドラマを演じて下さいと，歓迎と期待の言葉を贈った³⁾。それは次の通りである。

3) 『学内報』第257号，1998年5月。

「うらかな春らんまんの日差しに輝きがいや増し、匂うが如く若々しい清新の気あふれる若人を新たに迎え入れる慶びの中、本日ここに、御多用の中、多数のご来賓並びにご父母の皆様方のご臨席を賜り、平成十年度松山大学大学院・松山大学入学宣誓式を、かくも目出度く盛大に举行できますことは、わが大学の最も光栄とするところであり、謹んで関係各位に對しまして厚く御礼を申し上げます。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。松山大学の教職員に代わり、皆さんに對し両手を挙げて歓迎の意を表します。

ご父母の皆様方、お子様のご入学を心からお慶びを申し上げますとともに、お子様を松山大学にお送り下さいましたことに対して、衷心より感謝申し上げる次第でございます。

さて、新入生の皆さん！ 今、皆さんを迎え入れるに当たり、入学の心構えや大学とはどういうものであるのかを中心に、以下いくつかの事をお話し申し上げ、歓迎の言葉とさせていただきます。

まず、皆さんが入学された松山大学とはどのような大学か、そこから話を始めましょう。わが松山大学は、松山を中心とした地域の熱い期待をにない、近代日本の工業化の担い手として明治から昭和にかけて活躍した愛媛出身の実業家、新田長次郎——雅号温山と号しております。今、大学正門入ってすぐ右手にある温山翁の胸像が本学を見護っていますが——温山翁の巨額の浄財（寄付）を基にして、大正十二年（一九二三年）に創設された旧制の松山高等商業学校に遡ります。第二次大戦前後の一時期、松山経済専門学校と呼ばれた時期を経て、戦後、学制改革と同時にいち早く、大学に昇格して松山商科大学となり、平成元年、松山大学と改称して今日に至っています。私立の高商では西日本で最も古く、今年で創立七十五年の歴史と伝統を誇る、西日本で一二を争う名門校であると自負しており、これまで送り出した卒業生はおおよそ四万五千名を数え、実業界を中心に全国各地で活躍しています。とくに、愛媛について見ますと、主要企業

トップ陣は、ほとんどと言ってもいい程に、わが大学の卒業生であります。ですから、皆さんはこの輝かしい歴史と伝統に裏付けられた松山大学で誇りをもって学んで欲しいと強く願っています。

もう一つ大事な伝統について申し上げておきましょう。それは本学の創立以来、今日にいたるまで、確乎として受け継がれている三実主義と呼ばれるわが松山大学の校訓についてであります。真実、忠実、実用の三つの「実」をとって三実主義と呼んでいるのでありますが、この精神をかみくだいて申しますと、真実とは真摯に積極的に奥深い真理を探究する態度であり、忠実とは謙虚で誠実に人に接し、節操を重んじ、自らの言動に対してあくまでも責任を負う態度であり、実用とは真理を生活の中に生かし、社会に奉仕する積極進取の実践的態度のことであります。この三実主義の精神は、バブルのように一時流行して消え去るようなものではなく、たえず変転し、流動する人間社会の中で変わらざる人間に関する真理、万古不易の人間のあるべき生き方を指し示しているものであります。

皆さんは、経済学部、経営学部、人文学部、法学部とそれぞれの所属する学部は異なり、したがって専攻も異なるのでありますが、しかし、学部や専門は異なっても、根底において共通して学ぶこと、学ぶべきことがあります。それは人間の研究、人間社会の研究という事です。つまり、経済という側面から、経営という側面から、法律の側面から、文学の側面から、そして、言語という側面から、人間、および人間社会を研究するのでありますから、皆さんの勉強は、結局のところ、「人間とは何か」という問題に行き着くことになるのであります。そうだとしますと、研究の対象は、自分自身であり、自分を取り巻く周辺の人間であり、広く人間によって構成された社会であり、世界であります。したがって、机上の本を読むだけが勉強ではありません。勿論書物は読まなければなりません。同時に、現実の人間の動き、人間社会の動きを注意深く観察すべきであります。具体的に申しますと、現に社会で起きているあらゆる出来事や

状況を新聞などのメディアを通して丹念にフォローすることが大切な勉強になりますし、また、我が身を顧みながら、他人との付き合いのなかから人間を学ぶという姿勢が求められるのであります。そして、その際発すべき疑問は「なぜ」ということ、常に「なぜそうなのか」という疑問を執拗に持ち続けて頂きたいと強く願っています。そして、この姿勢こそ三実主義でもあります。新入生の皆さん、どうか最初紹介しました、「人間のありべき生き方を指し示す」三実主義という松明を高く掲げ、冷厳な事実を直視する姿勢を堅持しつつ、貪欲に人間なるもの、そして、人間社会を探検して頂きたいと思います。

さてここで、大学での勉学の仕方について一言申し上げておきます。大学での勉強は高校までのそれとは根本的に異なります。何と云っても、勉強は自分で主体的にやらなければなりません。何か分からないことがあれば、高校まででしたら、先生が解答を教えてくれたかもしれません。しかし、大学では基本的に自分で解答を見つけなければなりません。大学の勉学とは自分で問題を見つけ、自分で解答を発見する訓練であると言ってもいいでしょう。比喩的な言い方をすれば、大学は「辞書の引き方」の勉強の場という事もできます。松山大学の図書館は人文・社会科学関係を中心に六十万冊を越える蔵書を誇り、また、インターネットを通じて学外の学術情報センターにアクセスできますが、その中から自分に必要な情報や知識を自在に引き出す訓練であるということです。これは簡単なようで簡単ではありません。それが出来るようになった時、皆さんは真に大学卒業資格ができた、と明言しておきます。図書館は皆さんを待っています。

さて、皆さんは、もうお気づきだと思いますが、松山大学の誇るべきものの一つはキャンパスの素晴らしさです。図書館、情報機器が集まっている八号館、カルフル（厚生会館）、さらには新しく建てられたメインアリーナをはじめとする御幸キャンパスのスポーツ総合施設等素晴らしく、我々は西日本一だと自負しています。しかし、それも十分活用されてこそ

のことであります。

どうか諸施設を存分に活用して勉学は勿論、心身の鍛錬に励んでください。

誇れるのは施設だけではありません。わが大学は、教職員スタッフやカリキュラムの充実は言うに及ばず、国際化の一環としてのアメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、ニュージーランドや中国への海外短期語学研修プログラムや他大学——愛媛大学、札幌学院大学、南山大学、甲南大学——との単位互換制度等、時代に合った教育サービスの充実に努めて来ています。この様に、本学は、皆さんが勉学や課外活動——本学には百を越すサークルがあります——に青春を謳歌できる内容豊かなプログラムと舞台を用意しています。大学生活に大切なことは、皆さんが何か一つの事に打ち込もうとする意志の力を信じ、何か一つのことに没頭出来たら、それは素晴らしい学生生活であり、素晴らしい青春なのです。そして没頭出来た人と出来なかった人との間には四年間の学生生活の充実度に天と地程の開きが出来てしまうことは間違いありません。

これから学生生活を送る皆さんに対しまして、最後に申し上げたいことは、学友に巡り合うことの大切さについてであります。学友というものは、大学卒業後、社会に出てから得られる友人とは異なり、掛け値なしに心の許せる、二度と得難い生涯の友となるものであり、皆さんの人生を左右する程の無形の財産になります。学友は座して待っては得られません。サークルなり、ゼミなり、人の輪に積極的に参加してこそ得られるチャンスは膨らむものなのであります。皆さんが四年後の卒業時に、これこそわが真の知己と言える学友に巡り合っていることを祈っています。

皆さんは今青春の真ただ中にあり、若さの頂点にあります。恵まれた環境と舞台は与えられました。あとはやる気だけです。キャンパスで皆さんが素晴らしい青春のドラマを演じることを大いに期待して式辞といたします。

平成十年四月三日

松山大学学長

比嘉 清松 〕⁴⁾

4月16日、評議員の辞任（学長に就任した比嘉清松教授の後任）に伴う補欠選挙があり、石田徳孝経営学部教授が選ばれた。任期は残任期間で1998年4月17日より11月30日まで。

5月8日、経済学部は、現代の一連のアジアの通貨危機・金融危機からアジアの金融危機の原因と問題点を究明すべく、タイからタマサート大学のスイナイ・ポンナワライ准教授、韓国から建国大学の任先錫教授、法政大学から靄見誠良教授を迎え、ミニ・シンポジウム「アジアの通貨危機と今日の経済問題」を行なった⁵⁾。

6月11日、第4回松山大学懇話会（座長大亀孝裕）を開催した。委員からは出前公開講座の増設や社会人の受け入れ体制の整備等の意見が出された⁶⁾。

7月9日、温山会館新築工事（50年記念館の東側の地）の地鎮祭が行なわれた。温山会館はすでに解体された旧本館（1924年竣工）を彷彿させる設計であった⁷⁾。

9月18日、大学院の第Ⅰ期入試が行なわれた。経済学研究科は村上克美研究科長の下で大学院の種々の入試改革を行なわれ、今回から「学内進学者特別選抜制度」を導入し、4名が受験し、4名が合格した。外国人特別選抜では2名が受験し、2名が合格した。また、通常の入試では今回から試験科目を変更した。従来は外国語、経済学および専門科目を全て必須としていたが、今回より外国語と経済学をあわせて創設した基礎科目からいずれか1科目を、そして15の専門選択科目から1科目を選択するように変更した。そして、5名が受

4) 松山大学総務課所蔵。

5) 『学内報』第258号、1998年6月。

6) 『学内報』第259号、1998年7月。

7) 『学内報』第260・261号、1998年8・9月。

験し、4名が合格した。いずれも大学院生を増やす方策であった。なお、経営学研究科修士課程は8名が受験し、2名が合格した⁸⁾

9月24日、任期満了に伴う人文学部長選挙が行なわれ、飛驒知法(56歳、米文学史)が再選された。任期は1998年11月1日より2年間⁹⁾

11月11日、石田経営学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、中山勝己(51歳、消費者行動論・広告論)が選出された。任期は1999年2月1日から2年間¹⁰⁾

11月19日、任期満了に伴う学校法人の評議員選挙が行なわれ、投票の結果、青野勝広、岩林彪、岡山勇一(新)、国崎敬一、宍戸邦彦、妹尾克敏(新)、竹宮崇、館野日出男(新)、中山勝己(新)、三好登(新)、村上克美、森本三義(新)が選出された。理事の原田満範はなぜか選ばれなかった。事務職員では猪野道夫(新)、越智純展、高橋安恵、田窪千古、村上泰稔が選出された。任期は1998年12月1日から3年間¹¹⁾ なお、この時の評議員選挙は水面下で組織的に行なわれ、激しい選挙戦であった。

11月21、22日の両日、1999年度の推薦・特別選抜入試が行なわれた。結果は次の通りであった¹²⁾

	募集人員	志願者	合格者
経済学部(指定校制)	115名	119名	118名
(特別選抜)	20名	13名	12名
経営学部(アドミッションズ・オフィス)	70名	154名	102名
人文英語(指定校制)	10名	12名	12名

8)『学内報』第260・261号、1998年8・9月。同第263号、1998年11月。

9)『学内報』第263号、1998年11月。

10)『学内報』第264号、1998年12月。

11) 同。

12)『学内報』第259号、1998年7月。同第265号、1999年1月。経済の特別選抜は、スポーツが10名、その他が10名。人英は資格取得が3名、その他が7名。

	(特別選抜)	10 名	17 名	14 名
同	社会 (指定校制)	15 名	19 名	19 名
	(特別選抜)	若干名	0 名	0 名
法学部	(一般公募制)	50 名	232 名	81 名
	(特別選抜)	若干名	0 名	0 名

11 月 28 日、総合研究所 (所長は中山勝己) 主催の 3 回目となる「アジアの転機とその未来 松山大学国際フォーラム 1998」がカルフルで開催された。アジアに始まった通貨危機がロシア、中南米におよびさらにアメリカに迫りつつある現状が報告、討議された。講師として、法政大学の靄見誠良教授、タイのタマサート大学のスイウナイ・ポンナワライ准教授、ハンガリーの科学アカデミー経済研究所エヴァ・オジュヴァルド研究員、中国・復旦大学日本研究センター童適平副教授、韓国の韓南大学校金照年教授らが報告した¹³⁾

11 月 28、29 日の両日、第 37 回中国四国学生政治・経済ゼミナール大会が松山大学で開催され、6 大学、41 ゼミ、400 名が参加した¹⁴⁾

12 月 1 日、理事を専任する評議員会が開かれ、岩林彪、穴戸邦彦が再任され、原田満範に代わって新たに森本三義経営学部教授 (46 歳、工業会計・管理会計論) が選任された。任期は 1999 年 1 月 1 日から 3 年間¹⁵⁾

12 月 17 日、光藤経済学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、新たに清野良栄 (48 歳、現代資本主義論) が選出された。任期は 1999 年 4 月から 2 年間¹⁶⁾

1999 年 1 月 16、17 日の両日大学入試センター試験が行なわれた。結果は次の通りであった¹⁷⁾

13) 『学内報』第 263 号、1998 年 11 月。同第 265 号、1999 年 1 月。

14) 『学内報』第 265 号、1999 年 1 月。

15) 同。

16) 同。

17) 『学内報』第 267 号、1999 年 3 月。

	募集人員	志願者	合格者
経済学部	50 名	712 名	614 名
経営学部	100 名(前期)	867 名	668 名
人文英語	20 名	268 名	248 名
法 学 部	20 名	580 名	234 名
計	190 名	2,457 名	1,814 名

2月1日、総合研究所の所長が経営学部長に就任する中山勝己教授に代わって、新たに岡山勇一教授が任命され、就任した。任期は1999年2月1日から2年間¹⁸⁾

2月9～12日にかけて、1999年度の一般入試が行なわれた。9日が経済学部、10日が経営学部、11日が人文学部、12日が法学部の試験であった。一般入試の募集人員は経済265名、経営250名、人文英語60名、社会105名、法学部180名であった。試験会場は本年から高知が新会場に加わり、本学、東京（日本私学振興財団）、大阪（大阪YMCA会館）、岡山（代々木ゼミナール岡山校）、広島（代々木ゼミナール広島校）、小郡（北九州予備校山口校）、福岡（水城学園）、大分（大分府内学園）、高松（高松高等予備校）、高知（土佐塾予備校）の10会場。検定料は3万円。志願者は経済学部1,969名（前年2,272名）、経営学部1,704名（前年2,013名）、人文学部英語英米文学科452名（前年505名）、同社会学科975名（前年1,120名）、法学部1,276名（1,356名）、合計6,376名（前年7,266名）で、前年より890名、12.2%の減少となり、一層厳しい状況が続いた。合格発表は2月19日。経済学部1,139名、経営学部885名、人文学部英語英米文学科269名、同社会学科471名、法学部641名、合計3,405名（前年3,255名）を発表した。実質競争率は、経済1.7倍、経営1.9倍、人英1.6倍、人社2.0倍、法1.9倍、全学は1.8倍で、2倍を切るようになった。

18)『学内報』第267号、1999年3月。

その後、経済学部で、歩留り予測が外れ、後、40名の追加合格を出した。学費は前年と同一の据え置きで、入学金20万円、授業料57万円（ただし、2年次以降は2万円のステップ制とする）、教育充実費も17万円であった。長引く不況のため、家庭の可処分所得は上向いていないためであった¹⁹⁾

2月16日、田村法学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、竹宮崇教授（57歳、憲法）が選出された。任期は1999年4月から2年間²⁰⁾

3月1日、昨年度全学をあげて自己点検・評価作業が実施され、その報告書『松山大学の現状と課題－1998年度自己点検・評価報告書』が出来上がった²¹⁾

3月5日、大学院Ⅱ期入試が行なわれ、経済学研究科修士課程は2名が受験し、合格者はいなかった。経営学研究科修士課程は5名が受験し、2名が合格した²²⁾

3月16日、経営学部の大学入試センター利用入試（後期日程）の合格発表がなされ、募集定員20名に対し、志願者144名、合格者111名を出した²³⁾

3月19日、午前10時より愛媛県民文化会館にて卒業式が行なわれ、経済学部475名、経営学部457名、人文学部英語英米文学科116名、同社会学科158名、法学部272名が卒業し、経済学研究科修士課程は8名、経営学研究科修士課程は6名が修了した。

比嘉学長は式辞で、本学の歴史、校訓三実主義を振り返り、現在は世紀末、長引く平成大不況の厳しい現実を論じ、フランスの文豪デュマやドイツの詩人ヘルティの言葉を紹介し、常に背水の陣を敷いて職場に立ち向かえば、皆さんの未来は大いに希望あるものになると信じますと、激励した²⁴⁾ それは次の通りである。

19) 『学内報』第259号、1998年7月、同第262号、1998年10月、同第266号、1999年4月。

20) 『学内報』第267号、1999年3月。

21) 『松山大学九十年の略史』79頁。

22) 『学内報』第268号、1999年4月。

23) 同。

24) 同。

「昨夜来の雨もおさまり一雨ごとに木々の若葉が芽ぶき桜の開花も近い、今日このごろ本日、ここに平成十年度松山大学・大学院学位記・卒業証書・学位記授与式を挙げるにあたり、多数のご来賓並びに御父母の皆様方のご臨席をたまわり、新卒業生と教職員の出席のもとに、かくもめでたく盛大に挙行できますことは、わが大学の最も光栄とするところであり、教職員に代わり厚く御礼を申し上げます。

本日晴れの卒業を迎えたものは、大学院修士課程十四名、四学部千四百七十九名、以上合わせて千四百九十三名であります。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。みなさんは今学生生活に別れを告げ、社会に羽ばたこうとしています。勿論、中にはさらに進学される方もおいでのことと思いますが、多くの皆さんは実社会へ第一歩を踏み出す方かと受け止めます。いずれにしても卒業という事は人生の中の大きな節目であり、これまでの試練に満ちた幾多の関門を通過して晴れて栄えある卒業の日を迎えられた皆さんに対して盛大な拍手を送りたいと思います。

御父母の皆さん、お子様のご卒業おめでとうございます。これまで手塩にかけてお育てになり、在学中、支えてこられ、本日、このように栄えある日を迎えられたことに対しまして、心からお慶び申し上げますと共に、皆様方のこれまでの御苦勞に思いを致し、あらためて敬意を表する次第であります。

さて、卒業生の皆さん、皆さんの門出にあたり、皆さんが学び、後にされようとしている松山大学とはどのような大学であったのか、そして長い人生の中で、今、どのような位置にあるかということ、つまり、皆さんのこれまでの歩みを顧みて、これからを展望してみるということは、世紀末の激動する社会に出ていく上で、大切なことだと考え、いくつかのことを申し上げ、以下贈る言葉とさせていただきます。

まず、皆さんにとって自明のこと、二つの確認からはじめましょう。その一つ、それは皆さんが学んだ松山大学についてであります。わが大学は

大正十二年（一九二三年）創設の旧制松山高等商業学校に遡り、今年創立七十六年、これまでに送り出した卒業生総数は、本日皆さん方、一四九三名が温山会員として同窓会に加わる事により、およそ四万八千四百名に達することとなります。皆さんが同窓生として仲間入りする温山会員は今日全国各地で活躍しており、本学は実に多くの優れた人材を世に送り出している歴史と伝統を誇る大学であることを改めて再確認して頂きたいと思います。

次にもう一つ大事なことを申し上げておきます。それはわが大学の校訓、真実、忠実、実用の三つの「実」をとった三実主義のことであります。この精神は、かみくだいて申しますと、一に真摯に積極的に奥深い心理を探究する態度であり、二に謙虚で誠実に人に接し、節操を重んじ、自らの言動に対してあくまでも責任を負う態度であり、三に真理を生活の中に生かし、社会に奉仕する積極進取の実践的態度のことであります。この三実主義の精神は、一時流行して泡沫のように消え去るようなものではなく、たえず変転して流動する人間社会の中で変わらざる人間に関する真理であり、人間のあるべき生き方を指し示しているのであります。皆さんは卒業されて社会に出ていくにあたり、この三実主義の精神をしっかりと我が身に体して巣立って頂きたいと強く願っています。

ところで、皆さんがこれから出ていく社会はどうでしょう。

世紀末の日本は今、閉塞感に覆われている感があります。依然、先の見えない不況の泥沼から脱し切れないでいます。皆さんの中にはこの一年厳しい就職戦線に直面された方も多々おいでの事と思います。皆さんはこの意味で厳しい試練を乗り越えて本日を迎えられた事になりますが、しかし、これまでの試練は、混沌として低迷する今日の社会状況のもとで、皆さんがこれから社会に出て直面する試練の厳しさに比べればもの数ではないと断言致します。ただし、皆さんは、例えばバブルの頃のような、好況期に卒業した先輩とは異なって、就職に際して厳しい試練をくぐり抜けてき

たという、言わば無形の財産をもって卒業することになるものと思っています。この点に関して、経験則から一般に次のようなことが言われています。すなわち、好況期の卒業生は、就職時にうまくいった代わりに、卒業後社会に出てからは、必ずしも順調に行くとは限らず、逆に、不況期の卒業生は、就職時に苦勞した代わりに、卒業後、就職してから比較的順調であるというものであります。前者は、リクルートされたものの、飛び込んだ職場の厳しさとのギャップの大きさに戸惑い、乗り越える事ができず、時に挫折してしまうケースが多いということであり、後者は厳しい就職戦線をようやくにして突破し、背水の陣で職場に立ち向かい、その結果として、試練を乗り越えることができるというものであります。要するに、そこから教訓として汲み取るべきことは、社会に出ていくに当たって、最初の心構えが大切であるという事なのであります。

最前、温山会員は今日全国各地で活躍していると申し上げましたが、今社会の第一線で活躍する先輩の多くは、ことに戦後すぐの学生時代、諸施設も整備されていないキャンパスで、乏しく、貧しく、恵まれていず、皆さんと同様、厳しい就職難を乗り越えて、今日の地歩を築き上げてきたことに思いを致す時、厳しかった時代こそが、恵まれていなかった環境こそが先輩を鍛え上げたのだ、ということに学ばなければならないのであります。

卒業生の皆さん！ 皆さんは今大学を巣立ち社会に飛び立っていくにあたり、初心を忘れること無く、常に背水の陣を敷いて職場に立ち向かえば、皆さんの未来は、大いに希望のあるものと信じます。

卒業生の皆さん！ 皆さんは若い。若さを持つと言う事は積極果敢にチャレンジする精神をもつということでもあります。十九世紀フランスの文豪、アレキサンドル・デュマは、波乱万丈の「モンテ・クリスト伯」に「人生は待っているうちに過ぎてしまうものだ」と言わしめ、だから今日やるべきことを、明日に延ばしてはならないとし、絶望を乗り越えてチャレンジする精神を謳いあげる一大ロマンを展開しているのであります、

困難を物ともせず生きる勇気を与えてくれるモンテ・クリスト伯のように、皆さんの前途に待ち受ける幾多の試練が皆さんの中に秘める若さで突破されますことを祈っています。

最後に、十八世紀ドイツの詩人ルートウィッヒ・ハインリッヒ・クリストフ・ヘルティの詩を紹介し、贈る言葉とします。二十八歳の若さで夭折したヘルティは、その短い生涯で自らの死を予感しつつ、だからこそ限りある命を精一杯燃焼させ、生きていることの素晴らしさ、その生を受け止める大地と生きとし生けるものをはぐくむ自然の神秘を賛美しているのでありまして、現に生きている我々を鼓舞しているように思うのであります。

青春の花咲く日々に 誰がふさぎの虫に悩もう
花かおる若い額に 誰が憂いのしわを寄せよう
美しいかな 目出度いかな 神の大地は
命ある限り 心ゆくまで 美しい大地を楽しもう

平成十一年三月十九日

松山大学

学長 比嘉 清松 』²⁵⁾

3月25日、温山会と大学の連携の拠点として、永年の懸案であり、待望であった温山会館が完成し、今井琉璃男温山会長、加戸守行愛媛県知事ら多数の来賓の出席の下で竣工式が行なわれた²⁶⁾

3月31日、経済学部の出雲雅志（経済学史）が退職し、神奈川大学に転出した。法学部の青野覚（労働法）が退職し、転出した。また、国際交流室・学長特別補佐の小池春江が退職した²⁷⁾

25) 松山大学総務課所蔵。

26) 『学内報』第268号、1999年4月、同第269号、1999年5月。

27) 『学内報』第268号、1999年4月。

3) 1999 (平成 11) 年度

比嘉学長・理事長の2年目である。本年度の校務体制は、経済学部長は新しく清野良栄が就任し(1999年4月1日～2003年3月31日)、経営学部長は中山勝己が続けた(1999年2月1日～2001年1月31日)、人文学部長は飛騨知法が続け、法学部長は新しく竹宮崇が就任した(1999年4月1日～2001年3月31日)。経済学研究科長は村上克美、経営学研究科長は笠原俊彦が続けた。図書館長は倉田三郎、総合研究所長は岡山勇一が続けた。教務委員長は舘野日出男が4月30日まで続けたが(1998年4月1日～1999年4月30日)、病気のため、5月1日から久保進に代わった(1999年5月1日～2001年3月31日)。入試委員長は新たに宮沖宏が就任した(1999年4月1日～2000年3月31日)。学生委員長は新たに藤井泰が就任した(1999年4月1日～)。事務局長は村上泰稔が続けた。

学校法人面では、森本三義(財務)、岩林彪(教学)、宍戸邦彦(総務)が理事を続けた¹⁾。

本年度も次のような新しい教員が採用された²⁾。

経済学部

- | | |
|-------|--|
| 上田 雅弘 | 1965年5月生まれ。神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程。講師として採用。計量経済学，近代経済学入門。 |
| 黒田 晴之 | 1961年11月生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程。講師として採用。ドイツ語。 |
| 松井 名津 | 1960年1月生まれ。大阪市立大学大学院経済学研究科後期博士課程。講師として採用。経済学史，マルクス経済学入門。 |

1) 『学内報』第268号，1999年4月。同第269号，1999年5月。

2) 『学内報』第268号，1999年4月。

人文学部

赤羽 仁志 1968年1月生まれ。mcgill大学phd.講師として採用。英文法・英作文。

4月1日、「松山大学各学部教授会規則施行細則」が制定・施行された。同細則は教員の資格審査並びに任免及び懲戒にかかる手続きを定めたものであった³⁾。

4月2日、午前10時より入学式が行なわれ、経済学部466名、経営学部512名、人文英語108名、社会148名、法学部250名、大学院経済学研究科修士課程8名、大学院経営学研究科修士課程3名が入学した。比嘉学長は式辞で本学設立の三恩人、歴史、卒業生の活躍ぶり、完成したばかりの温山会館を紹介し、また三実主義を語り、大学において、人間と人間社会の探究をしていただきたい、と述べ、皆さんは今青春の真っただ中にあり、キャンパスで素晴らしい青春のドラマを演じることを大いに期待していると、祝福の言葉を贈った⁴⁾。それは次の通りである。

「うらかな春らんまん、生きとし生けるものの輝きがいや増し、匂うが如く若々しい清新の気あふれる若人を新たに迎え入れる慶びの中、本日、ここに、多数のご来賓並びにご父母の皆様方のご臨席を賜り、平成十一年度松山大学大学院・松山大学入学宣誓式を、かくも盛大に挙行できますことは、わが大学の最も光栄とするところであり、教職員一同に代わり、謹んでご出席の皆様方に対しまして厚く御礼を申し上げます。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。まずは松山大学教職員を代表し、皆さんに対し両手を挙げて歓迎の意を表します。

ご父母の皆様方におかれましては、さぞやお子様のご入学にご安堵のこ

3) 『学内報』第269号、1999年5月。

4) 同。

とと拝察申し上げ、心からお喜びを申し上げますとともに、お子様を松山大学にお送りくださいましたことに対しまして、心から感謝申し上げる次第であります。

さて、新入生の皆さん！ 今皆さんを迎え入れるに当たり、入学に際しての心構えやわが松山大学とはどのような大学であるのかと言った事柄を中心に以下いくつかのをお話し申し上げ、皆さんに対する歓迎の言葉と致します。まず、皆さんが入学した松山大学とはどのような大学か、その創立から今日に至るまでのわが大学の歴史を簡単に纏めてみましょう。

わが松山大学は、大正中期、松山を中心に澎湃として沸き上がった高等商業学校設立の熱い期待を背景に、正岡子規の後見人で叔父の加藤拓川・松山市長——明治期の外交官として活躍し、子規の短い生涯に決定的な影響を与えた拓川につきましても、司馬遼太郎の傑作「坂の上の雲」に詳しく描かれているところでありますが——、その拓川を中心に設立が押し進められ、拓川の設定要請に応えたのが、近代日本の工業化の担い手で、明治から昭和にかけて活躍した郷土出身の実業家、新田長次郎（雅号温山）であります。こうして温山によって提供された巨額の浄財（寄付）を基にして、大正十二年（一九二三年）、旧制の松山高等商業学校が創立されたのであります。第二次大戦前後の一時期、松山経済専門学校と呼ばれた時期を経て、戦後学制改革と同時にいちやく大学に昇格して松山商科大学となり、平成元年、松山大学と改称して今日に至っています。

今本学キャンパス内に立つ加藤拓川、新田温山、そして初代校長として本学の礎石を築いた加藤彰廉の三人の胸像が本学の行く末を見守っているのですが、こうして設立された本学は、私立の高商では西日本で最も古く、今年で創立七十六年の歴史と伝統を誇る西日本随一の私学の雄であり、これまで送り出した卒業生は四万八千人を越え、全国各地で活躍しているのでありまして、とくに、愛媛について見ますと、主要企業のトップ陣は、ほとんどと言ってもよい程に、わが大学の卒業生なのであります。

でありますから、皆さんはこの輝かしい歴史と伝統に裏付けられた松山大学で誇りをもって学んで欲しいと強く願っています。本学の歴史と伝統を象徴するものとして、本学キャンパス正門に入って左手すぐの所に、本学同窓会の名を冠した温山会館が先月完成したばかりであります。その二階は歴史資料展示室となっています。完成したばかりの温山会館は自由に参観出来ます。どうか皆さん松山大学の歴史と伝統を示す展示物を是非早めに御覧頂きたく、ここにご案内申し上げる次第であります。

もう一つ大事なことを申し上げておきましょう。それは初代加藤校長によって提唱され、今日まで確乎として受け継がれている三実主義と呼ばれるわが大学の校訓であります。真実、忠実、実用の三つの「実」をとって三実主義とよんでいるのでありますが、この精神は、かみくだいて申しますと、真実とは、真摯に積極的に奥深い真理を探究する態度であり、忠実とは、謙虚で誠実に人に接し節操を重んじ、自らの言動に対してあくまでも責任を負う態度であり、実用とは、真理を生活や社会に役立て、社会に奉仕する積極進取の実践的態度のことです。この三実主義の精神は、バブルのように一時流行して消え去るようなものではなく、たえず変転し、流動する人間社会の中で変わらざる人間に関する真理、万古不易の人間のあるべき生き方を指し示しているものであります。

申し上げるまでもなく、松山大学は文科系総合大学であります。それゆえ、皆さんの所属する学部や専攻は異なっても、根底において共通して学ぶべきことがあります。それは人間の研究、人間社会の研究という事です。人間および人間の集団、小は家族から大は国家に至るまで、さらに今日では国家を越えて、国際的な組織に至るまで、人間によって構成される社会の研究という事になるのでありますから、皆さんの勉強は結局のところ「人間とは何か」という問題に行き着く事になります。とすれば、皆さんは常に我が身を顧みながら、他人との付き合いの中から人間を学ぶ姿勢が求められますし、二十世紀が終わろうとしている今日、現実社会

で起きている様々な出来事や状況を新聞等を通して注意深く追跡することが大切な勉強になります。

新入生の皆さん、どうか人間に関する事実を冷静に観察し、人間なるもの、そして人間社会を大胆に探検して頂きたいと思います。

つぎに大学での勉強とはどういうものかについて一言申し上げておきます。大学での勉強は高校までのそれとは根本的に異なります。勉学は自分で主体的にやらなければなりません。何か分からないことがあれば、高校まででしたら、先生が解答を教えてくれたかもしれません。しかし、大学では基本的に自分で解答を見つけなければなりません。大学の勉強とは自分で問題を見つけ、自分で解答を発見する訓練であると言ってもいいでしょう。とくに、皆さんはこれまで入試問題のようにマーク式の問題、つまり、与えられた選択肢の中から一つの解答を選び、それが正解であるかどうかが問われる、という様な勉強を積んできたものと思います。しかし、大学での勉強はそのようなものではないのであります。というのは、皆さんがこれから主として学ぶ対象となる人間および人間社会に絶対唯一の正解は無いと言ってよく、往々にして相矛盾する複数の解答が存立し得るのであります。したがって、問題は複数の解答の中から最終的に自分は何を選択するか、なぜそれを選択するかを皆さん自身が主体的に説得的に説明できるかどうかという問題に帰着します。換言しますと、皆さんは、これから卒業するまでの四年間の勉強を通して、他人を説得できる確乎とした意見を持てる人間になれるかどうかが問われているのであります。

わが大学はそれに応えるべく、カリキュラムを始めとして、ハード・ソフト両面にわたって充実に努めて参りました。例えば、図書館は人文・社会科学関係を中心に七十万冊になんなんとする蔵書を誇り、また、インターネットを通じて学外の学術情報センターにアクセスできるのであります。その中から自分に必要な情報や知識を自在に引き出すことができるようになっていきます。図書館はみなさんを待っています。皆さんには勉学上

の様々なチャンスが与えられています。例えば、国際化の一貫としてのアメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、ニュージーランドや中国への海外短期語学研修プログラムや他大学——愛媛大学、札幌学院大学、南山大学、甲南大学——との単位互換制度等もその一つでありましょう。また、本学は勉学だけでなく、皆さんがクラブ活動——本学には百を越すサークルがあります——に青春を謳歌できるよう、内容豊かな舞台を用意しています。

皆さんは今青春の真ただ中にあり、若さの頂点にあります。本学の校歌にある「緑が萌える」キャンパスで素晴らしい青春のドラマを演じることが大いに期待して式辞とします。

平成十一年四月二日

松山大学学長 比嘉 清松 〕⁵⁾

5月20日、天野郁夫（東大名誉教授、大学審議会議員、本学評議員）による「21世紀の大学増と今後の改革方策－大学審議会答申を巡って－」と題した講演会が行なわれた。その中で、天野教授は「今、大学は規制緩和の名のもと、競争と選択の意思決定を迫られている。規制緩和が生むものは、個性化と多様化であり、どこが生き残るかのサバイバルゲームである」と述べ、そして、「大学は学生へのサービスの提出度合いにより選別される流れが見えてきた。これからは様々な教育の提供がなされ、伝統的な大学を危機に迫りやる状況になるだろう、大学とは何を与えることになるのか、大学が自発的にならない限り、21世紀に本当の変化の中で生き残れる姿が見出せない」と危機感を述べた⁶⁾。

5月31日、比嘉学長・理事長ら大学側は、1986年度以来続けてきた臨時定員増が1999年度（2000年3月31日）で終了するので、臨定の半分を恒常定

5) 松山大学総務課所蔵。

6) 『学内報』第271号、1999年7月。

員化することを文部省に申請した。それは次の通りである⁷⁾

	臨定前の定員	臨定後の定員	新しい入学定員	収容定員
経済学部	350 名	450 名	390 名	1,560 名
経営学部	350 名	450 名	390 名	1,560 名
人文英語	80 名	100 名	100 名	400 名
同社会	100 名	120 名	120 名	480 名
法 学 部	200 名	250 名	225 名	900 名

経済、経営は臨定の半分を恒常定員化すると、本来 400 名であるが、第 3 次定員増を経済、経営のみ行なったので、配慮し各 10 名少なくした。他方人文は第 3 次臨時定員増のとき人文が否決したため、それを考慮して各 10 名を人文に振り向けたためであった。

7 月 7 日、経済学部講演会が、法政大学の金子勝教授を招いて行なわれた。演題は「セーフティネットの経済学－不況克服の経済学」で、公的年金について現在の保険方式から税方式に改めることを提案した⁸⁾

9 月 17 日、大学院の 2000 年度第 I 期入試が行なわれ、学内進学者特別選抜入試では経済学研究科では 4 名が受験し、4 名が合格した。経営学研究科でも 4 名が受験し、4 名が合格した。また、一般入試では経済学研究科では 7 名が受験し、4 名が合格した。経営各研究科では 9 名が受験し、2 名が合格した⁹⁾

10 月 16 日、総合研究所主催の「市民フォーラム 1999」が開催された。テーマは中四国地方の都市づくりで、基調講演を中村時広松山市長が「日本一のまちづくり」と題して行なった¹⁰⁾

7) 『学内報』第 274 号, 1999 年 10 月。

8) 『学内報』第 272・273 号, 1999 年 8・9 月。

9) 『学内報』第 272・273 号, 1999 年 8・9 月。同第 275 号, 1999 年 11 月。

10) 『学内報』第 274 号, 1999 年 10 月。同第 276 号, 1999 年 12 月。

11月19日、経済学部講演会が京都大学名誉教授の伊東光晴教授を招き、「経済政策はこれでよいか」と題し、行なわれた。伊東教授は「経済政策を考える人間は出来る事をやり抜く勇氣と共に、出来ない事を出来ないと思えぬ英知が必要である。これが経済政策40年間の結論である」と述べた¹¹⁾

11月20日、21日の両日、2000年度の推薦・特別選抜入試が行なわれた。結果は次の通りであった。特徴としては、指定校推薦で、経済、人英、人社で志願者数が募集人員を下回ったことで、課題を残した¹²⁾

	募集人員	志願者	合格者
経済学部（指定校制）	115名	101名	101名
（特別選抜）	15名	14名	12名
経営学部（アドミッションズ・オフィス）	78名	236名	187名
人文英語（指定校制）	10名	8名	8名
（特別選抜）	10名	14名	13名
社会（指定校制）	15名	10名	10名
（特別選抜）	若干名	0名	0名
法学部（一般公募制）	50名	186名	103名
（特別選抜）	若干名	0名	0名

12月2日、第13回経済学部学内ゼミナール大会が開催され、23のゼミが12の部門で発表、討論がなされた¹³⁾

2000年1月14日、15日の両日大学入試センター試験が行なわれた。結果は次の通りであった¹⁴⁾

11) 『学内報』第277号、2000年1月。

12) 『学内報』第277号、2000年1月。経済学部の特別選抜はスポーツが10名、その他が5名。人英の特別選抜は資格取得が3名、その他が7名。

13) 『学内報』第277号、2000年1月。

14) 『学内報』第279号、2000年3月。

	募集人員	志願者	合格者
経済学部	50 名	1,099 名	779 名
経営学部	80 名(前期)	1,118 名	607 名
人文英語	20 名	425 名	333 名
法 学 部	20 名	589 名	317 名
計	170 名	3,231 名	2,036 名

2月9～12日にかけて、2000年度の一般入試が行なわれた。9日が経済学部、10日が経営学部、11日が人文学部、12日が法学部の試験であった。一般入試の募集人員は経済258名、経営250名、人文英語60名、社会105名、法学部175名であった。試験会場は、大分を廃止し、新たに徳島会場を新設し、本学、東京(代々木ゼミナール代々木校)、大阪(大阪YMCA会館)、岡山(代々木ゼミナール岡山校)、広島(代々木ゼミナール広島校)、小郡(北九州予備校山口校)、福岡(公務員ビジネス専門学校)、高松(高松高等予備校)、徳島(高川予備校佐古本校)、高知(土佐塾予備校)の10会場。検定料は3万円。志願者は経済学部1,600名(前年1,969名)、経営学部1,521名(前年1,704名)、人文学部英語英文学科366名(前年452名)、同社会学科782名(前年975名)、法学部1,029名(前年1,276名)、合計5,298名(前年6,376名)で、すべての学部で減少し、全体では前年より1,076名、16.9%減少し、過去最高の減少となり、厳しい「冬の時代」が続いた。合格発表は2月18日。経済学部1,130名、経営学部746名、人文学部英語英文学科254名、同社会学科440名、法学部521名、合計3,091名(前年3,405名)を発表した。実質競争率は、経済1.4、経営2.0、人英1.4、人社1.8、法1.9、全体1.7となり、2年連続2倍を割り、深刻な事態となった。学費は前年と同一の据え置きで、入学金20万円、授業料57万円(ただし、2年次以降は2万円のステップ制とする)、教育充実費も17万円であった。長引く平成大不況のため、完全失業者は5%に及び、リストラが進み、家計の可処分所得は減少の方向にあるためであった¹⁵⁾

この入試結果についてコメントしよう。①一般入試の志願者の減少はとくに深刻であった。志願者数は1991年度がピークで1万1,495名であったが、1995年度に9,333名と1万名を割り込んで以降、毎年平均10%前後の減少を続け、本年遂に5,298名となり、ピーク時の半分以下に落ち込んだ。②また、実質競争率が2倍を2年連続して割り込み、その低下も深刻であった、といえる¹⁵⁾。

3月2、3日の両日、2000年度の大学院第Ⅱ期入試が行なわれた。経済学研究科修士課程は8名が受験し、6名が合格した。経営学研究科修士課程は4名が受験し、1名が合格した¹⁷⁾。

3月16日、経営学部のセンター試験利用入試の後期日程の発表があり、募集定員30名に対し志願者が212名、合格者を69名発表した。

3月17日、午前10時より愛媛県民文化会館にて卒業式が行なわれ、経済学部428名、経営学部421名、人文英語112名、社会134名、法学部269名が卒業し、経済学研究科修士課程は4名、経営学修士課程は5名が修了した。比嘉学長は式辞で「卒業生の皆さん！ 皆さんは今大学を巣立って社会に飛び立っていくにあたって、初心を忘れることなく、常に背水の陣を敷いて職場に立ち向かえば、皆さんの未来は大いに希望あるものと信じます」と激励した¹⁸⁾。

3月31日、経済学部では専任教員の退職者はいなかったが、経営学部では高沢貞三が退職した。また、小木紀親が退職し、転出した。人文学部では渡部孝が退職した¹⁹⁾。

4) 2000 (平成 12) 年度

比嘉学長・理事長の3年目である。

15) 『学内報』第271号、1999年7月、同第274号、1999年10月、同第277号、2000年1月。同第279号、2000年3月。

16) 『学内報』第277号、2000年1月。宮沖宏「2000年度入試結果報告」『学内報』第279号、2000年3月。

17) 『学内報』第280号、2000年4月。

18) 『学内報』第280号、2000年4月。式辞は、総務課になぜか残っていない。

19) 『学内報』第280号、2000年4月。

本年度の校務体制は、経済学部長は清野良栄、経営学部長は中山勝己、人文学部長は飛驒知法、法学部長は竹宮崇が続けた。経済学研究科長は新しく岩橋勝が就任し、経営学研究科長は新しく岡野憲治が就任した。図書館長は倉田三郎、総合研究所長は岡山勇一が続けた。教務委員長は久保進が続けた（1999年5月1日～2001年3月31日）。入試委員長は新たに小田敬美が就任した（2000年4月1日～2001年3月31日）。学生委員長は藤井泰が続けた（1999年4月1日～）。事務局長は村上泰稔が続けた。

学校法人面では、森本三義（財務）、岩林彪（教学）、宍戸邦彦（総務）が理事を続けた¹⁾。

本年も次のような新しい教員が採用された²⁾。

経済学部

新規教員なし。

経営学部

溝上 達也 1974年5月生まれ。一橋大学大学院商学研究科修士課程修了。講師として採用。簿記原理。

人文学部

中村 太一 1960年10月生まれ。上智大学大学院文学研究科博士前期課程修了。講師として採用。英語講読。

法学部

安藤 律 1965年10月生まれ。state university of new york at baffarow doctor of philosophy。講師として採用。英語。

村田 毅之 1957年4月生まれ。明治外学大学院法学研究科博士後期課程。講師として採用。社会保障法、労働法。

1) 『学内報』第280号、2000年4月。同第281号、2000年5月。

2) 『学内報』第281号、2000年5月。

4月4日、午前10時より愛媛県民文化会館にて入学式が行なわれ、経済学部540名、経営学部546名、人文学部英語英米文学科156名、同社会学科161名、法学部286名、経済学研究科修士課程13名、経営学研究科6名が入学した。比嘉学長は式辞において「学友というものは社会に出てから得られる友人とは異なり、無条件に掛け値なしに心の許せる二度と得難い生涯の友となるものです。真の知己といえる学友に巡り会うことを祈っています。法学の校歌にある『緑が萌え、弾み、歌う』キャンパスで素晴らしい青春のドラマを演じることを大いに期待しています」と歓迎の励ましの言葉を贈った³⁾。なお、大学院経済学研究科の修士が定員の10名を超えたのは開設以来はじめてのことであった。学内進学者特別選抜等入試改革の成果であった。

4月10日、比嘉理事長・学長より去る1月に「本学の国際化度を検証しつつ、本学国際化の方向に関するある程度の予測の下にそのための教学体制事務機構を整備する」方策についての諮問を受け、「国際交流機関検討委員会」（委員長岩林彪教学担当理事）は、4回会議を行ない、その報告書（答申）を出した。それは国際センターの設置、具体的には国際センター運営委員会、国際センター事務機構の設置であった⁴⁾。

5月10日、松山大学温山会総会・松山支部総会が開かれ、会長が今井琉璃男氏（大学1回卒）に代わって、麻生俊介氏（大学7回卒）が選出された⁵⁾。

6月16日、大学院（経済・経営）「学内進学者特別選抜入試」が行なわれ、経済学研究科修士課程は4名が受験し、4名が合格した。経営学研究科修士課程は3名が受験し、3名が合格した⁶⁾。

6月22日、第6回松山大学懇話会が全日空ホテルで開催され、大亀会長ら14名が出席して、個性ある専門家と社会のため、人のため行動力のある人材

3) 『学内報』第281号、2000年5月。同第282号、2000年6月。

4) 『学内報』第280号、2000年4月。

5) 『学内報』第282号、2000年6月。

6) 『学内報』第284・285号、2000年8・9月。

の育成、等の提言が寄せられた⁷⁾

9月18日、大学院第Ⅰ期入試（博士前期課程＝修士課程）が行なわれた。経済学研究科修士課程は4名が受験し、3名が合格した。経営学研究科修士課程は9名が受験し、4名が合格した⁸⁾

9月21日、飛騨知法人文学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、国崎敬一（50歳、社会学概説）が選出された。任期は11月1日から2年間⁹⁾

9月末、松温会（温山会松山支部）があり、青野勝広教授（本学卒業生）が講演をした。そこで、青野教授が松山大学の惨憺たる状況を述べ、現体制を批判し、温山会の支援のもとに次の学長選挙に出る意欲を示したという。

9月29日、2000年度前期卒業式が挙行された。前期卒業式が正式に行われるのはこれが最初であった。比嘉学長は式辞において、本学のOBであるカネボウの会長兼社長の帆足隆の苦勞の人生を紹介し、また、本学の歴史、三実主義を述べ、そして、現代の厳しい時代状況を説明し、最後に詩人坂村真民の「念ずれば花ひらく」の一節を紹介し、激励した。それは次の通りである。

「本日、平成十二年度前期松山大学・松山短期大学卒業証書・学位記授与式を挙行するにあたり、まずは卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日晴れの卒業を迎えたものは、大学四十一名、短期大学一名、以下合わせて四十二名であります。卒業生の皆さん、皆さんは今学生生活に別れを告げ、社会に羽ばたこうとしています。勿論、中にはさらに進学される方もおいでのことと思いますが、多くの皆さんは実社会へ第一歩を踏み出す方かと受け止めます。いずれにしても、卒業という事は人生の中で大きな節目であり、これまでの試練に満ちた幾多の関門を通過して晴れて栄えある卒業の日を迎えられた皆さんに対して盛大な拍手を贈りた

7) 『学内報』第284・285号、2000年8・9月。

8) 『学内報』第287号、2000年11月。

9) 『学内報』第286号、2000年10月。

いと思います。

ところで、前期卒業式をこのように、後期三月の卒業式と同様の形で行うのはこれが初めてであります。その意味を少しばかり申し上げておきたいと思います。二十一世紀まで残り百日を切り、今、大学は大きく変わろうとしています。すなわち、これからの大学は、学びたい者が、学びたい時に、学びたい事を、学びたい期間学び、卒業していく、或いは習得していく場になっていく、二十一世紀の大学はそのようになっていくものと考えています。大学が四年間、短期大学が二年間と固定的に考えるのではなく、極端に言えば、学びたいことを学びとった時、あるいは習得したと思った時が大学を修了する時期という事になります。これを制度で言えば、学期制の導入ということになります。従って、卒業式は三月とは限らず、同じウエイトで九月にも行うことにした訳であります。

卒業生の皆さん、皆さんの中には、在学二年半、あるいは三年半、そして四年半、あるいは五年半と違いはあるでしょうし、三月期の卒業生と卒業の時期は異なりますが、卒業の意味に違いは全くありません。すなわち、大学で一体何を学んだかという点に関しては全く同じであります。

今、ここに一人の松山大学 OB をご紹介致したいと思います。昭和三十六年に本学を卒業されたカネボウの会長兼社長帆足隆氏であります。今年初め、私がかねボウの東京本社に帆足社長を訪ねた際、貧しかった学生時代を回想され、次のように言われました。「自分は父の死もあって、一時学業を中断し、卒業に六年もかかった。卒業前、就職問題で迷っていた時、指導教授の今は亡き古川洋三教授から『これからはセールスマンの時代だ』の一言で、あのカネボウの化粧品販売の営業マンになる決心をし、以来、営業畑の第一線で活躍し、ついには、危機に陥っていた名門カネボウの社長になり、従業員二万人のトップとして立て直しに当たっている」との事でありました。この様に、帆足社長は卒業が遅れ、挫折を味わい、入社後も必ずしも順風満帆でなく、幾多の試練や困難を乗り越えて今日に至った、

と言うことになるででありましょう。したがって若い頃の挫折や出遅れは問題ではなく、体調を整え、ペースを乱さず、何事にも臆する事なく、果敢に生き抜くことこそが人生マラソンをゴールまで確実に走り抜く要諦であるということを我々に教えてくれるものであります。しかも、帆足社長の時代は卒業の遅れは挫折や出遅れと受け止められたのでありますが、最前申し上げましたように、皆さんの時代はそうではないのであります。

卒業生の皆さん、皆さんが今問われているのは、皆さんが学び、後にされようとしている松山大学はどのような大学であったのか、そして長い人生の中で、今、どのような位置にあるかということでもあります。そこで、皆さんのこれまでの歩みを顧みて、さらにはこれからを展望し、二十一世紀を目前にして激動する社会に出ていく皆さんに対して、以下のようなことを申し上げて皆さんに対する贈る言葉とさせて頂きたいと思います。

まず、皆さんにとってあるいは自明のこと、二つの確認から始めましょう。その一つ、それは皆さんが学んだ松山大学についてであります。わが大学は大正十二年（一九二三年）創設の旧制松山高等商業学校に遡り、今年創立七十七年、これまでに送り出した卒業生総数は、本日ただいま、皆さん方、四十二名が温山会員として同窓会に加わる事により、およそ四万八千名を越え五万に達しようとしています。皆さんが同窓生として仲間入りする温山会員は全国各地で活躍しており、本学は実に多くの優れた人材を世に送り出している歴史と伝統を誇る大学であることを改めて再確認して頂きたいと思います。

次にもう一つ大事なこと、それはわが大学の校訓、真実、忠実、実用の三つの「実」をとった三実主義のことでもあります。この精神は、かみくだいて申しますと、第一の真実とは、真摯に積極的に奥深い真理を探求する態度であり、第二の忠実とは、謙虚で誠実に人に接し、節操を重んじ、自らの言動に対してあくまでも責任を負う態度であり、第三の実用とは、真理を生活の中に生かし、社会に奉仕する積極進取の実践的態度のことであ

ります。この三実主義の精神は、一時流行して泡沫のように消え去るようなものではなく、たえず変転して流動する人間社会の中で変わらざる人間に関する真理であり、人間のあるべき生き方を指し示しているのです。皆さんは卒業されて社会に出ていくにあたり、この三実主義の精神をしっかりと我が身に体して巣立って頂きたいと強く願っています。

ところで、皆さんがこれから出ていく社会はどうでしょう。世紀末の日本は今、閉塞感に覆われている感があります。依然、先の見えない未曾有の大不況の泥沼から脱し切れないでいます。皆さんの中には厳しい就職戦線に直面された方も多々おいでの事と思います。この意味では厳しい試練を乗り越えて本日を迎えられた事になりますが、しかし、これまでの試練は、皆さんがこれから社会に出て直面する試練の厳しさに比べればものの数ではないと断言致します。

最前、温山会員は全国各地で活躍していると申し上げましたが、今社会の第一線で活躍する先輩の多くは、皆さん方のように恵まれていず、施設も整備されていないキャンパスで、乏しく、貧しい中を生き抜き、厳しかった就職戦線を乗り越えて、今日の地歩を築き上げてきたことに思いを致す時、厳しく恵まれていなかった環境こそが先輩を鍛え上げたのだ、ということに学ばなければならないのであります。

卒業生の皆さん！ 皆さんは今大学を巣立って社会に飛び立っていくにあたって、初心を忘れること無く、常に背水の陣を敷いて職場に立ち向かえば、皆さんの未来は大いに希望あるものと信じます。

最後に、松山に住み、九十歳を越してなお現役の詩人として詩作を続けておられる坂村真民の詩集「念ずれば花ひらく」の一節「二度とない人生だから」を紹介して式辞と致します。「祈りの詩人」とも呼ばれたり、「国民詩人」とも称えられる真民の詩は「人はどう生きるべきか」を命題に人間としての在り方を深く掘り下げ、読むものに生きる勇気と力を与えてくれるように思います。

二度とない人生だから
一輪の花にも
無限の愛を
そそいでゆこう
一羽の鳥の声にも
無心の耳を
かたむけてゆこう

二度とない人生だから
まず一番身近な者たちに
できるだけのことをしよう
貧しいけれど
こころ豊かに接してゆこう

二度とない人生だから
戦争のない世の
実現に努力し
そういう詩を
一篇でも多く
作ってゆこう

わたしが死んだら
あとをついでくれる
若い人たちのために
この大願を
書きつづけてゆこう
二度とない人生だから

平成十二年九月二十九日

松山大学・松山短期大学

学長 比嘉 清松 』¹⁰⁾

10月7日、総合研究所主催の「市民フォーラム 2000 地方分権時代の福祉とまちづくり NPO と『地域通貨』」がカルフルにて開催され、丸山真人東京大学大学院総合文化研究科教授により『地域通貨の諸類型』と題する基調講演が行なわれ、貨幣の歴史や地域通貨の様々なタイプについて話され、あと、事例報告、討論がなされた¹¹⁾

10月6日、国際化の中で、留学生を受け入れるための施設ならびに交流の場として、「交流学生ハウス」「学生交流室」が有師寮一階に完成した¹²⁾

10月12日、上海の復旦大学と本学経済学部との学術交流協定の調印式が行なわれた。そして、13日に調印を記念して「経済学部国際シンポジウム 2000」が行なわれた。テーマは「21世紀のアジア・アジアの経済発展と愛媛経済のグローバル化」で、上海復旦大学の陸徳明学院長や建国大学の任線錫助教授、ジェトロの石川幸一氏、今治の越智逸宏一広タオール工業社長らが報告した¹³⁾

11月1日発行の『学内報』287号に、人文学部長に就任した国崎敬一学部長が就任の辞として、松山大学の生き残り、人文学部の生き残り戦略を記している。そのうち松山大学についてみると、松山大学の現状について強烈な危機意識を挙げた。すなわち、一般入試の競争倍率が急速に低下し、全学で2.10→1.79→1.68と低下した。特に経済と人英は1.4となり、f化（フリー化）の恐れがある。また、偏差値もこの10年で10ポイントも下がっている、として大要次のような戦略を述べている。(1)不人気学部を人気学部に変える（専門資格志向への積極対応、IT革命への積極対応、文理統合、カリフォルニア州

10) 松山大学総務課所蔵。

11) 『学内報』第286号、2000年10月。同第287号、2000年11月。

12) 『学内報』第287号、2000年11月。

13) 同。

立大学との提携、国際化・グローバル化、実学志向、就職重視等)、(2)ダウンサイジング(学生定員の削減)、(3)脱18歳事業(3年次編入の制度化、エクステンション講座、昼夜開講、夜間土日に社会人スクール、通信教育、大学院等)を示した。定員削減は人件費削減、学費引き上げにつながるため、中々困難で決断が必要であるが、その他は、妥当な戦略を示した。

11月8日、中山勝己経営学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、村上宏之(44歳、会計学)が選出された。任期は2001年2月1日より2年間¹⁴⁾

11月18、19日、2001年度の推薦・特別選抜特別入試が行なわれた。今年度の入試の新しい特徴は、経済学部が指定校を前年の115名から130名に増やし、また一般公募制(募集人員20名)を導入したこと、経営学部がアドミッションズ・オフィス入試の募集定員を前年の78名から126名に大幅に増やしたこと、人文学部英語英米文学科も指定校を前年の10名から20名に増やしたことなどである。結果は次の通りであった¹⁵⁾

	募集人員	志願者	合格者
経済学部(指定校制)	130名	141名	141名
(特別選抜)	17名	13名	13名
(一般公募)	20名	164名	84名
経営学部(アドミッションズ・オフィス)	126名	204名	178名
人文英語(指定校制)	20名	18名	18名
(特別選抜)	10名	12名	11名
同 社会(指定校制)	15名	12名	12名
(特別選抜)	若干名	0名	0名
法学部(一般公募制)	70名	183名	121名

14)『学内報』第288号、2000年12月。

15)『学内報』第283号、2000年7月。同第289号、2001年1月。

(特別選抜)

若干名

1名

1名

12月末で比嘉学長の任期が終了するので、松山大学学長選考規程に基づき、選挙管理委員が選出され、そして、候補者の立候補、推薦が行なわれた。立候補者はなく、また、現職の比嘉教授の推薦の動きがあったが、比嘉教授が断った。

11月16日、岩林彪経済学部教授（推薦代表比嘉清松）と青野勝広経済学部教授（推薦代表妹尾克敏）が推薦された。その後、激しい選挙戦が行なわれた。

11月27日、17時30分より820番教室にて、国崎人文学部長主催による候補者2人に政策・戦略を聞く会が催された。

11月28日、投票が行なわれた。有権者は教員117名、職員87名の合計204名で、結果は、棄権が2名、無効が9名、有効投票が193名で、青野教授107名、岩林教授86名で、青野教授（56歳、都市経済学、公共経済学）が当選した¹⁶⁾。事務職員は多数が青野教授に投票し、教員は青野教授は少数で、多数が岩林教授に投票した、と言われている。

12月20日、岩林彪理事の辞任にともなう理事を選出する評議員選挙が行われ、妹尾克敏（47歳、憲法、行政法）が新理事に選出された¹⁷⁾。

12月31日付けで、法人監事の神森智名誉教授が辞任した¹⁸⁾。

12月31日、比嘉清松学長・理事長が退任した。

お わ り に

比嘉清松学長時代（在任：1998年1月1日～2000年12月31日）の松山大学の歴史に関し、功績および特記すべき事項についてまとめておこう。

第1に、比嘉学長時代は、私学冬の時代をひしひしと感じた時代であった。

16) 『学内報』第289号、2001年1月。

17) 同。

18) 『学内報』第291号、2001年2月。

志願者数は宮崎学長時代から減少し続けていたが、その減少が一層激しくなった。一般入試の志願者数は1991年度がピークで1万1,495名であったが、2000年度には5,298名となり、ピーク時の半分以下に落ち込んだ。また、実質競争率は2倍を割り込み、危機的となった。そして、そのために種々の入試改革が各学部で取り組まれた（一般入試の募集人数を減らし、指定校やアドミッションズ・オフィス入試の拡大等）。また、大学院でも院生確保のために改革がなされた。

第2に、松山大学の自己点検・自己評価作業を行い、「松山大学の現状と課題－1998年度自己点検・評価報告書」が刊行された（1999年3月）。

第3に、臨時定員が1999年度（2000年3月31日）で終了するにあたり、対応を協議し、臨定の半分を恒常定員化することを決定し、文部省に申請し、認可されたことである（1999年7月認可）。

第4に、施設の充実がはかられた。

①温山会館の竣工（1999年2月）。

②国際化の中で、留学生を受け入れるための施設ならびに交流の場として、有師寮の1階に学生交流ハウス、学生交流室をつくった（2000年10月）。

③国際センターを設置することを決めた（2001年4月施行）。

第5に、「愛媛大学と松山大学との単位互換に関する協定書」を締結し（1998年3月）。また、上海の復旦大学と本学経済学部との学術交流協定が締結された（2000年10月）。

第6に、長引く平成大不況、金融危機の現状を背景に、各学部、総合研究所がよく学術講演会を開き、学生や社会のためにその社会的責任を果たしたことである。

第7に、宮崎満学長時代に引き続き、学内での対立・抗争、混乱が続いたことである。